

進むがん治療

秋大医学部の取り組み

▷ 8 ◁

南秋田郡の四十代の女性
は昨年、黒い便が出たの
に不安を感じ、すぐに秋田
市の医療機関を受診した。
腸などに異常はなかった
が、肝臓がんとみられる
腫瘍が見つかった。患部に
酸素が届かないように肝動
脈をふさぐ肝動脈塞栓療法
を受けたが十分な治療効果
が得られず、紹介を受けて
今年四月に秋田大医学部付
属病院を受診した。

国内では五例しか行われて
いないという最先端の手術
法。今回執刀した同大医学
部外科科学講座消化器外科学
分野の山本雄造教授が、前
任地の京都大で平成十一年
に開発した。

肝臓がんの切除は、肝臓
全体にがんが多発している
場合に限らず、発生部位に
よっては切除が困難にな

のが難しかった。また、手
術時に肝臓の血流を止めら
れる時間には限度がある
が、血管を傷つけないよう
に周辺のがんを取り除くた
めには時間が足りないケー
た。

大静脈の接合部付近で、直
径約四センチのがんがへばりつ
くように広がっていた。こ
れまでなら手術はもちろ
ん、ほかの治療も困難だっ
た。

肝臓が仮死状態に
なったことで、小腸から送
られてくる血液が逆流する
と小腸が腫れてしまう。そ
こで、その血液の通り道と
なる門脈を切開してチュー
ブを取り付け、ポンプ装置
を介して心臓に血液を返す
も可能になった。

山本教授は「過去の統計
を重視した治療法の選択が
主流になっているが、それ
ではこの患者さんは手の施
しようがないと判断され
る。そつしたときでも今回
のように病状をよく見極
め、さまざまな技術を組み
合わせた治療が有効なこ
ともある。患者さんは治療に
疑問があつたら主治医
以外の専門医にも意見
を求め、生きるチャン
スを逃すようなことが
ないようについてほし
いと訴えている。

肝移植の技術を活用

「進行した肝臓がんで、
このままだと余命は半年と
告げられたときは目の前が
真っ暗になった。しかし、
再び元気になり、長く生き
られる手術があると説明を
受け、希望がわいてきた」
間もなくして手術が行わ
れ、成功。再発予防のため、
術後四週間にわたり抗がん
剤の投与を受けた後に退院
した。日常生活で飲酒以外
の制限はなく、「やりたい
ことがたくさんある。子ど
もの部活動の応援に行きた
いし、趣味も再開したい」
と目を輝かせる。

その一例が左、中、右
の肝静脈と下大静脈の合流
部付近に、がんができたど
き。肝静脈は胃や腸で吸収
した栄養を含んだ血液が肝
臓で代謝され、心臓に送ら
れる際の出口となる血管で
下大静脈につながる。

今回、手術を行った女性
の場合は、がんが二カ所に
できていた。一つは握りこ
すもあつた。

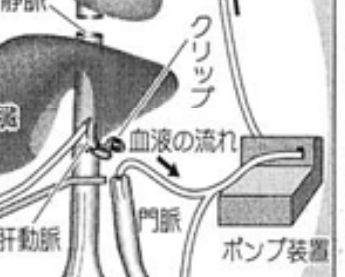
■仮死状態延長し手術
手術法は生体肝移植の技
術を活用。冷却した臓器保
存液を肝臓に送っているもう
一つの血管の肝動脈は、遮
断されても血液は別のルー
ルで循環してカバール。肝
臓に血液を送っているもう
一つの血管の肝動脈は、遮
断されても血液は別のルー
ルで循環してカバール。

体外循環でカバーする。肝
臓に血液を送っているもう
一つの血管の肝動脈は、遮
断されても血液は別のルー
ルで循環してカバール。

体外循環でカバーする。肝
臓に血液を送っているもう
一つの血管の肝動脈は、遮
断されても血液は別のルー
ルで循環してカバール。

■国内実施は過去5例
この女性が受けたのは、

この女性が受けたのは、

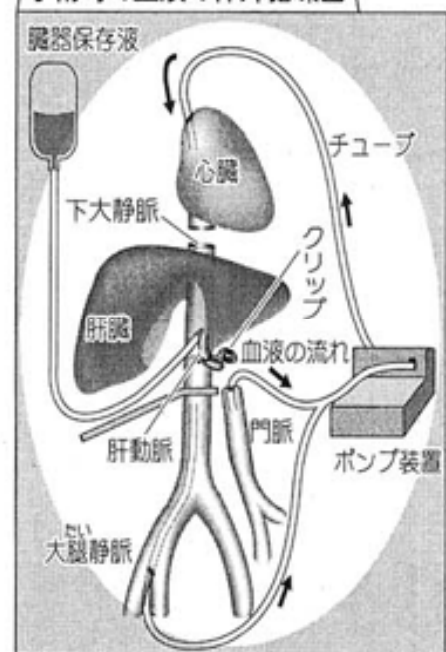


体外循環でカバーする。肝
臓に血液を送っているもう
一つの血管の肝動脈は、遮
断されても血液は別のルー
ルで循環してカバール。

肝臓がんの切除

この女性が受けたのは、

手術時の血液の体外循環図



この女性が受けたのは、